

## Manusmṛti 王権論における第 8, 9 章の意義(上)

沼田 一郎

### はじめに

Manusmṛti (Manu) は、ダルマ文献を代表するものと目されている。しかし古層のダルマーストラ (Dhs) から Manu が成立するまでには数百年が経過しているから、その内容には大きな差がある。Dhs の中にも Āpastambadhhs のように、自派の他の kalpasūtra 類と緊密な連関を有し、それ自体もよくまとまった構成のものもあれば、Viṣṇusmṛti のように後代の改変の跡が歴然としているものもある。

Dhś は「ヴァルナとアーシュラマのダルマ」を説き明かすことを主題として、精粗の差はあるが 4 つのヴァルナそれぞれに関して記述している。それに対して、Dhs では「家住期のバラモン男子」に関する規定が中心である。バラモン以外の 3 ヴァルナの規定は少なく、バラモンとともに社会の上層部を形成するクシャトリヤあるいは王を対象とした規定（以下「rājadharmā セクション」）も、Manu のそれと比べると、質量ともはるかに貧弱であると言ってよい。<sup>(1)</sup>

rājadharmā は本来 dharma ではなく artha のカテゴリーにおいて扱われるべきものと言いうる。したがって、Kauṭilya の Arthasāstra (Kauṭ) が専らそれを扱うのは当然とも言えるが、dharma 文献の中で重視されるようになるのは Manu においてである。rājadharmā セクションは Manu 全体の約 3 分の 1 を占め、バラモンの dharma と並ぶ重要な課題であることは自明のようであるが、他のセクションとの連関、rājadharmā セクションそのものの構成などについては未だ十分には解明されていないと思われる。また、個々の規定の由来や後の資料への影響などについても、本稿において考察することにしたい。

# 1. Manusmṛti の構成と rājadharmasekshon

Manu は全12章からなる。扱う内容は多岐にわたるが、以下のように整理することができるだろう。

章	内 容	分 類		
1	世界創造／内容一覧	序 章		正 し い 生 き 方  本 論
2	dharma の源泉／幼児期／学生期	バラモン		
3	家長期			
4				
5				
6	林住期／遊行期			
7	王の職務			
8	司法規定／雑則			
9	司法規定／王の職務	ヴァイシャ／シュードラ		
	ヴァイシャ／シュードラ			
10	ヴァルナ間混血	例外規定／逸脱からの回復		
	窮迫時の生活			
11	贖 罪			
12	業と輪廻／Manu の果報	終 章		

「本論」は、前後半の二つの部分に分かれている。前半の2～9章は各ヴァルナに規定された dharma すなわち「正しい生き方」を示し、後半の第10, 11章はヴァルナ間混血や窮迫時の生き方 (āpaddharma) といい、本来承認され得ない事態を扱い、その正当化やあるべき姿への回復のプロセスを示している。

「正しい生き方」の諸規定は4 ヴァルナの順序に従って配置され、ここではバラモンと並んで王／クシャトリヤに強い関心が注がれていることがわかる。このような章立てから、一般には第7章に王の日常の職務としての rājadharmā を、そして第8～9章に司法 (vyavahāra) 規定を配当していると見なされている。しかし実はそれほど明瞭に区分されているのではないことを以下によって示すことにしよう。

第7章は全体が rājadharmā の叙述に終始している。このような大部

な章を *rājadharmā* の記述に費やすのは、*dharma* 文献では *Manu* が最初であり、それは以下の三つの構成部分からなっている。

- ①王の神的起源 (1～13)
- ②恐るべき刑罰 (*daṇḍa*) の正当な行使 (14～34)
- ③日常の王の職務 (35～226)

第7章の核心部分はこのうち③である。7.36は次のように *rājadharmā* セクションの実質的な開始宣言をする。

tena yad yat sabhṛtyena kartavyaṃ rakṣatā prajāḥ/  
tat tad vo 'haṃ pravakṣyāmi yathāvad anupūrvaśaḥ//7.36

その人民を守護する者が家臣と共になすべき事柄、

私はそれをありのままに、順を追って汝に語るであろう。

そして多様にして具体的な王の職務が叙述されるのであるが、形式上の特徴として、それらが一日の「日課表」のような完結した構成になっていることを指摘しうる。<sup>(2)</sup>つまり、続く8、9章で詳説される司法以外の職務についてはここで残りなく解き明かされたことになるのである。

## 2. 8, 9章の構成上の問題

続く第8～9章の「司法篇」は本来王の職務の一部であると言える。従前の *Dhs* と比較して格段に詳細かつ具体的であって、民事・刑事の両分野について現代的な意味での「実定法」と呼びうるものである。

ただし、*rājadharmā* セクションとの関連で注意すべきは、司法の主題 (*mārga, pada*) は *Manu* の場合18種あり、それが8章と9章の大半を占めるのであるが、18主題のどれにも属さない箇所が両章にあるという点である。

第8章では、民事法では第1主題「負債の不払い (*ṛṇādāna*)」から第10主題の「境界の確定 (*sīmāvinirṇaya*)」までの「経済法」に属する問題と、第11主題「言葉の暴力 (*vākpāruṣya*)」から第15主題<sup>(3)</sup>の「姦淫 (*strīsaṃgrahaṇa*)」に至る刑事法に属する問題が扱われる。司法規定は次の宣言によって一端終了し、*rājadharmā* セクションが始まるのである。

eteṣāṃ nigraho rājñaḥ pañcānāṃ viṣaye svake/

sāmṛāṇyakraṭ saṁjātyeṣu loke caiva yaśaskaraḥ//8. 387//

自領においてこれら5つのもの<sup>(4)</sup>を制することは、王にとっては同じ類のもの（つまり王）の間での統王たることと<sup>(5)</sup>、この世での名声をもたらしものである。

388以下に rājadharma（多くは第7章のものとは重複しない）が規定された後、次のような偈でこの章は終了する。

ahany ahany avekṣeta karmāntān vāhanāni ca/

āyavyayau ca niyatān ākarān kośam eva ca//

evam sarvān imān rājā vyavahārān samāpayan/

vyapohya kilbiṣaṁ sarvaṁ prāpnoti paramāṁ gatim//8. 419-420//

〔王は〕日々、事業、搬送具、定期的な収入と支出、鉾山及び宝物庫を点検するべきである。

このようにして、これらのすべての訴訟を完全に遂行する王は、すべての罪を除去し、最高の帰着点を獲得する。

8. 420は司法篇としての第8章の終わりを宣言しているが、8. 419は司法の主題とは何の関連もないことは一目瞭然である。つまり、第8章は司法篇の後にヴァイシャ・シュードラ規定を含む一般的な王の職務（rājadharma）を接合しているのである。8. 419は rājadharma セクションの終了を告げ、それをも含んだ章全体の最終偈が8. 420なのである。

第9章は民事法の「家族法」に分類しうる主題が中心である。第16主題「夫婦の dharma (strīpuṁdhama)」以降を扱ったあと、各種の刑罰について略述し、次のように述べて司法篇全体を終了する。

udito 'yaṁ vistaraśo mitho vivādamānayoḥ/

aṣṭādaśasu mārgaṣu vyavahārasya nirṇayaḥ//9. 250//

以上のように、18の主題について互いに係争する双方にとっての訴訟の決定が語られたのである。

しかしこれで第9章が終了するのではなく、この後に第8章の場合と同様 rājadharma が述べられ、以下の偈によってヴァイシャ／シュードラ規定へと連結しているのである。

evam caran sadā yukto rājadharmaṣu pārthivaḥ/

hiteṣu caiva lokasya sarvān bhr̥tyān niyojayet//

eṣo 'khilaḥ karmavidhir ukto rājñāḥ sanātanaḥ/

imaṃ karmavidhiṃ vidyāt kramaśo vaiśyaśūdrayoh//9. 324-325//

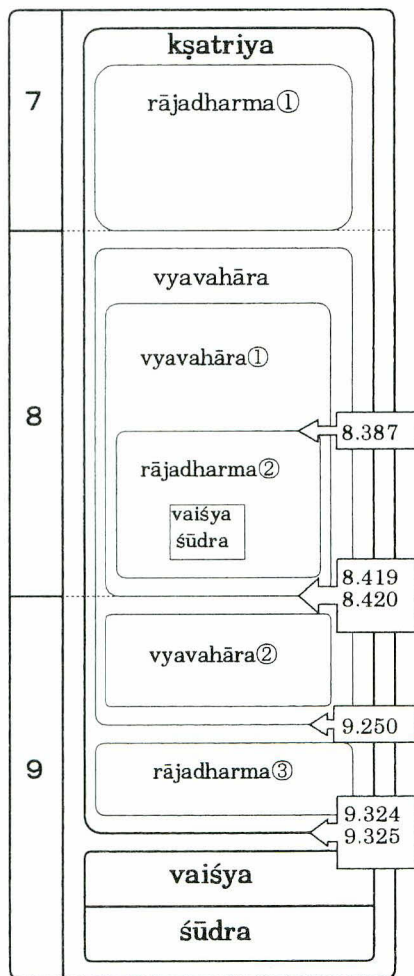
王は常にこのように行動しつつ rājadharman に専心し、一切の臣下を世の人々の繁栄のために任命するべきである。

以上において、王にとっての永遠の行動規範の全体が語られた。続いてヴァイシャとシュードラの行動の準則について知るべきである。

以上の構成は右図のように表示することができるであろう。(◁は区切りとなる偈を示す) 第7章冒頭から9.325までが広義の kṣatriya あるいは王を対象とした規定であり、その内容は狭義の rājadharma 規定と司法規定に大別されうる。rājadharma 規定については第7章が形式的に一応完結したものとなっている<sup>(5)</sup>。しかし、続く二章において再び言及され (rājadharma ②, ③), しかもそれらが二つに分割された司法規定のセクションと相互に入り組んだ構成になっている点に注意する必要がある。

前述のようにこの両者は必ずしも有機的に関連しておらず、もともと別個に存在していたものを連結したということを想定しうるのである。

第7章の rājadharma 規定については、これまでも繰り返し取り上げられ、その特徴も説明されている。Manu の rājadharma 全体を考察するためにはそれに加えて8, 9章の記述が検討されなければならないであろう。



## 2. Manu 第 8, 9 章の rājadharmā 規定

まず、第 8, 9 章の《rājadharmā 規定②, ③》の内容と他の文献の対応箇所を以下に示すと以下の通りである。

②	③
1. パラモンや家族を敬うこと (388-393) 2. 徴税と免税 (394-398) 3. 洗濯屋と織物屋の職務 (396-397) Kauṭ 4. 1. 14-24; 4. 1. 8-13 Yāj 2. 238; 4. 税関 (śulkasthāna) (398-400) Kauṭ 2. 21-22 5. 商品の価格の設定 (401-402) 6. 度量衡 (tulāmāna, pratīmāna) (403) Kauṭ 2. 19, 40 Viṣ 5. 122 7. 渡河料 (404-407) Kauṭ 2. 28, 18 Yāj 2. 263; Viṣ 5. 131-2 8. 船舶上の損失の弁済 (408-409) Kauṭ 2. 28. 26	1. 未獲得の土地の征服と入植 (251-) Kauṭ 2. 1-4 Manu 7. 69-76 2. 「トゲ」の除去 (252-) 王国に恐怖がないこと (255) スパイを目とせよ (256) 公然たる盗賊と隠れた盗賊 (257) 刑罰 (262-293) Kauṭ 4 3. 王国の 7 要素 (294-297) Kauṭ 6. 1. 1 Manu 7. 157 (5 要素説) 4. 王の行動原則 (298-) 王の行動と yuga 理論 (301-302) MBh 12. 70 王の行動と神々 (303-312) Manu 5. 96; 7. 3 5. 王とパラモンとの共存・協力 (313-325)

rājadharmā ②, ③は他の dharma 文献に類似の規定を多く有する。しかし注意すべきは、Manu の第 7 章の記述とほとんど重複しないこと、Kauṭ との対応がより顕著なことであろう。Kauṭ の場合それは主として第 2 巻「長官の活動 (adhyakṣapracāra)」と第 4 巻「トゲの除去 (kaṇṭakaśodhana)」に見られる。以下にそれぞれの対応関係を検討しよう。

### ・洗濯屋と織物屋の職務 (396-397)

śālmālīphalake ślakṣṇe nenijyān nejakaḥ śanaiḥ/

na ca vāsāṃsi vāsobhīr nirharen na ca vāsayet//8. 396//

洗濯屋は滑らかなシャールマリー樹の板の上で丁寧に洗うべきであ

る。また、衣服を「別の」衣服と取り違えてはならない。「間違えて」着させてもならない。

tantuvāyo daśapalaṃ dadyād ekapālādhikam/

ato 'nyathā vartamāno dāpyo dvādaśakaṃ damam//8. 397//

織物屋は10パラの「糸を布に織って」, 1 パラ増量して引き渡すべきである。これ以外のやり方をするものは12パナを罰金として支払うべきである。

この2偈は各種の徴税を説く箇所配置されており、前後の規定とは内容上の整合性がない。他文献の対応箇所は以下の通りである。

### 【洗濯屋】

rajaḥ kāṣṭhaphalakaślakṣaṇaśilāsu vastrāṇi nenijyuḥ//

anyatra nenijato vastropaghātaṃ ṣaṭpaṇaṃ ca daṇḍam dadyuḥ//

mudgarāṅkāḍ anyad vāsaḥ paridadhānās tripaṇaṃ daṇḍam dadyuḥ//

paravastravikrayāvākrayādhāneṣu ca dvādaśapaṇo daṇḍaḥ,

parivatane mūlyadviguṇo vastradānaṃ ca//Kauṭ 4. 1. 14-17//

洗濯屋は木の板や滑らかな石板の上で衣服を洗うべきである。

他の場所で洗う者は、衣服の破損分と6パナを罰金として支払うべきである。

棍棒の印を付けた衣服以外のものを着用する者は、3パナを罰金として支払うべきである。

他人の衣服を売ったり貸したり質入れしてしまう者については、12パナが罰金である。すり替えるなら、価格の2倍を「罰金とし」、衣服を返却するべきである。

vasānas trīṇ paṇān daṇḍyo nejakas tu parāṃśukam/

vikrayāvākrayādhānāyācīteṣu paṇān daśa//Yāj 2. 238//

高級な衣服を着用する洗濯屋は、3パナが罰金となる。

売ったり貸したり質入れたり、頼まれて「人に渡した」場合は、10パナである。

Kauṭの対応箇所は第4巻第1章「職人の監視 (kārukarakṣaṇa)」に含まれ、金細工師 (suvarṇakāra)、医師 (bhiṣaj) などと同じ範疇で扱われている。ここでは次に見る「織物屋 (tantvāya)」を含む各種職人

などの不正利得や職務怠慢に対する刑罰を規定しており、洗濯屋の規定をここに置く必然性がある。しかしながら Yāj の場合、この論題は第15主題「強奪」と第16主題「既売品の引き渡し拒否」との間に置かれた「補則 (viśeṣa)」に含まれ、位置づけが明確ではない。それは以下のような理由によると考えられる。

Yāj の rājadharmā セクションと司法篇は、内容面のみならず個々の単語レベルでも明らかに Kauṭ の影響を受けているが、全体的な規定の配置については Manu のそれを踏襲している<sup>(8)</sup>のである。つまり、既に述べたように Manu は司法主題を二つの章に配分し、司法規定の後にそれぞれ rājadharmā 規定の②と③を置いている。Yāj も第2章全体を「司法主題 1～15」「補則 (viśeṣa)」「司法主題16～19」「雑則 (prakīrṇaka, 司法主題としては20)」に分け、前半の「司法主題」に続く「補則」の中にこの「洗濯屋」の規定を置いているのである。同じ章の中であれば、継続して司法規定を叙述する途中で「補則」によってそれを分断する必然性はないであろう。このような章の構成は Manu の 8, 9 章のそれとよく対応するものである。Yāj が Manu の構成を模倣したが故の不自然さであると言えよう。

#### 【機織屋】

tantuvāyā daśaikādaśikaṃ sūtraṃ vardhayeyuḥ//

vṛddhicchede chedadviguṇo daṇḍaḥ//Kauṭ 4. 1. 8-9

機織り屋は、10の糸を〔布に織って〕11に増量するべきである。  
増加分を失ったなら、損失の2倍が罰金である。

śate daśapalā vṛddhir aurṇē kārṇāsasautrike/

madhye pañcapalā vṛddhiḥ sūksme tu tripalā matā//Yāj 2. 183//

羊毛製品、綿製品の場合、100〔パラ〕について10パラの増量。

〔糸の太さが〕中くらいの場合は5パラ、細い場合は3パラであることが合意されている。

Kauṭ の場合、この部分は「洗濯屋」と同じく「職人の監視」において扱われているが、Yāj では更に扱いが異なり、第8主題「売買の解約

(krītānuśaya)」に属する規定となっている。この主題は Kauṭ, Manu にも見られるところであるが、いずれの場合も当該主題には「機織屋」あるいは繊維製品の増量に関する記述は含まれず、解約あるいは商品の返却に際しての手数料もしくは罰金を規定しているのである。それに対して Kauṭ4.1.10 以降では、糸を布に織るに際しての増量と損失について論じている。

以上の二つの規定は、Kauṭ の対応箇所が同じ章に見られることから、Manu と Kauṭ の間には何らかの関連があるといえるだろう。しかし、Manu, Kauṭ 双方から影響を受けている Yāj では、その扱いに混乱が見られることが確認された。

#### ・税関 (śulkaśthāna) (398—400)

各種の「税」の中の或る種のもは śulka と呼ばれている。主として商業活動に由来するものであり、「関税」もそれに含まれる。これは śulkaśthāna と称する施設において徴収されることになる。

śulkaśthāneṣu kuśalāḥ sarvapaṇyavicakṣaṇāḥ/  
kuryur arghaṃ yathāpaṇyaṃ tato viṃśaṃ nṛpo haret//8. 398//  
rājñaḥ prakhyātabhāṇḍāni pratiśiddhāni yāni ca/  
tāni nirharato lobhāt sarvahāraṃ haren nṛpaḥ//8. 399//  
śulkaśthānaṃ parihaarann akāle krayavikrayī/  
mithyāvādī ca saṃkhyāne dāpyo 'ṣṭaguṇam atyayam//8. 400//

税関について熟知していて、あらゆる商品に精通している者たちが、商品にふさわしく価格を設定するべきである。その20分の1を王が徴収するべきである。

王にとっての〔専売〕品、禁制の品を欲望の故に持ち出そうとする者の、一切の財産を王は没収するべきである。

税関を避け、不正な時に売買する者、また計量に際して偽りを申告する者は、逃れた分の8倍を〔罰金として〕支払うべきである。

ここに見られる「税関」あるいはそれに類する施設は、Dhs では Viṣ に言及される (śulkaśthānād apākrāman sarvāpahāram āpnuyāt//Viṣ 3. 31//) のみであり、やや成立の遅い Nārada, Bṛhaspati には用例がある。また、別稿で指摘したように、パーリ仏典には “suṅkatthāna” とし

て言及されている<sup>(9)</sup>。Kauṭ によればこれは śulkaśālā と称され、地方と都市とを分ける地点に設置されて、「旗」を標識としたものであることが以下の記述から知られる<sup>(10)</sup>。

śulkādhyakṣaḥ śulkaśālāṃ dhvajam ca prāṇmukham udanmukham vā mahādvārābhyāse niveśayet//2. 21. 1//

税関長官は、śulkaśālā と東向きあるいは北向きの旗を大門の近くに設置せよ。

dhvajamūlam atikrāntānāṃ cākṛtaśulkānāṃ śulkād aṣṭaguṇo daṇḍaḥ//

pathikōtpathikās tad vidyuh//Kauṭ 2. 21. 16-17//

旗の下を通りながら関税を納めない者には関税の 8 倍が罰金となる。道路や道路外に活動する「スパイ」がそれを発見するべきである。

税関で摘発されるべき不正についても、Kauṭ に対応する規定を見いだすことができる。

śastravarmakavacaloharatharatnadhānyapaśūnām anyatamam anirvāhyam nirvāhayato yathāvaghuṣito daṇḍaḥ pañyanāśaś ca//Kauṭ 2. 21. 22//

ご禁制の品である武器、甲冑、金属、戦車、宝石、穀物、家畜のうちどれかを持ち出す者には公示されたとおりの罰金が科せられ、その品は没収される。

śulkabhayāt paṇyapramāṇamūlyam vā hīnam bruvatas tad atiriktam rājā haret/

śulkam aṣṭaguṇam vā dadyāt//Kauṭ 2. 21. 10-11//

関税を「支払うことを」躊躇して、商品の量や原価を過少に申告するならば、王はその余分を没収せよ。

あるいは関税の 8 倍を支払うべきである。

禁制の品を持ち出すこと、8 倍の罰金が科せられることが共通している。一方、Yāj にも同様の規定がある。

arghaprakṣepaṇād viṃśaṃ bhāgaṃ śulkaṃ nrpo haret/  
vyāsiddham rājayogyam ca vikrītaṃ rājagāmi tat//  
mithyā vadan parīmāṇam śulkasthānād apāsaran/

dāpyas tv aṣṭaguṇaṃ yaś ca savyājakrayavikrayī//Yāj 2.261-2//  
 価格を定めて、王は20分の1を śulka として徴収せよ。

禁制のもの、王の専売品が販売されたら、それは王に帰属する。

計量について偽りの申告をする、税関を避けて通る、

そして、詐欺的な売買をする者は、8 倍の罰金を支払うべきである。

この規定は Yāj 第 2 章「司法編」の第17主題「共同事業 (sambhūya-samutthāna)」に含まれているが、他文献の対応箇所でこのように税関規定を含むのは Nārada のみである。<sup>(11)</sup>

### ・度量衡

tulāmānaṃ pratīmānaṃ sarvaṃ ca syāt sulakṣitam/

ṣaṭsu ṣaṭsu ca māseṣu punar eva parīkṣayet//8.403//

すべての tulāmāna と pratīmāna は正しく刻印されなければならない。  
 い。

そして 6 ヶ月ごとに再度検査し直すべきである。

sulakṣita は「印づけられる」(渡瀬), “carefully marked (Doniger)”, “dully marked (Bühler)” と解されるが、註釈家は以下のように解している。<sup>(12)</sup>

parīkṣāṃ kārāyēd āptair adhikāribhir (Medh)

pārthivena lakṣitam mudritam (Sarv)

bhagnādikaṃ tyaktvā punar mudrayet (Rāgh)

Kauṭ の対応箇所は、各種「長官 (adhyakṣa)」の一つである「計量長官 (pautavādhyakṣa)」の職務の一つとして述べられる。

caturmāsikaṃ prāṭivedhanikaṃ kārāyēd//

apratividhāsyātyayaḥ sapādaḥ saptaviṃśatipaṇaḥ//

prāṭivedhanikaṃ kākaṇīkam ahar ahaḥ pautavādhyakṣāya

dadyuḥ/2.19.40-42//

四ヶ月ごとに検印を行うべきである。

検印していないものについては27と4分の1パナが罰金である。

検印に対して、1 kākaṇīka を毎日計量長官に支払うべきである。

ここで問題になっているのは計量のための「分銅」や「升」である。<sup>(13)</sup>

4 ヶ月ごとであるという点で Manu とは異なるが、王が度量衡につい

で独占的にそれを管理し、定期的にそれを点検するということであろう。

# 註

- (1) Dhs 類では rājadharmā セクションは全体の約 1 割を占める。
- (2) このような叙述形式は Kauṭ, MBh に見られる他, Yāj にも受け継がれている。
- (3) これら主題の名称と順序は, 8.4-8 に見られるものと若干異なっている。
- (4) ここに言う「5つのもの」とは5種類の刑事問題である。
- (5) Rāghavānanda は, cakravartin と解している。
- (6) 核心部分は既に述べた「日課表」の形式を採用し, 第7章全体がその枠組みに収められている。この章の記述はその意味では完結していると言えるが, 実際にはこの形式は重要な意味を持っていない。
- (7) この箇所の para は井狩・渡瀬訳のように「他人の」(『ヤージュニャヴァルキヤ法典』p.127) と訳すことも可能であるが, ここでは洗濯屋に定められた「棍棒の印を付けた衣服」以外の「高級な衣服 (Bālakrīḍa は, “parāṃśukam utkr̥ṣṭam vastram” と説明している)」の着用を禁じている, と解した。
- (8) Muneo TOKUNAGA: Structure of the Rājadharmā section in the Yājñavalkya-smṛti (i, 309-368) 『京都大学文学部紀要』第32号, 1993年, pp. 1-42。
- (9) 拙稿「税関における免税規定」『印度哲学仏教学』第7号, 1992年, pp.54-66。
- (10) Viṣṇu-smṛti 3.31に対する Nandapaṇḍita の註によれば, śulkaśthāna は市場や沐浴場など(haṭṭaghaṭṭādi)であると言う。
- (11) śulkaśthānam vaṇik prāptaḥ śulkaṃ dadyād yathopagam/  
na tad vyatihared rājñam balir eṣa prakalpitaḥ//  
śulkaśthānam parihaṇa na kāle krayavikrayī/  
mithyoktvā ca parīmāṇam dāpyo 'ṣṭagaṇam atyayam//Nār 3.12-13//
- (12) Bhāruci のみ “tulā māna-pratīmāṇam” と読み, “trayam apy etad rājamudrāṅkitam anādhṛṣyam bhavati” と解するが, この読みは困難であろう。
- (13) prāṭivedhanika は PW, MW にも登録されず, Schmidt の補遺に Kauṭ のみを出典として登録されている。Śrīmūla は, “prāṭivedhanam eva prāṭi-vedhanikaṃ parīśodhanaṃ, vinayāditvāt ṭhak” と解する。ちなみ

(38)

に，ここに引用される Pāṇini5.3.34は，“vinayādibhyas ṭhak” が通常のテキストである。

〈キーワード〉 Manusmṛti, Arthaśāstra, rājadharma, vyavahāra